

2004年度卒業論文要旨

北九州市紫川周辺の再開発による都市のイメージの変化

赤坂 えりか

北九州市紫川周辺地区は、元来「鉄の町」として戦後の近代化、高度経済成長を担ってきた。しかし鉄冷えとともに町の活気も失われ、「工業の町」から「商業の町」へと生まれ変わるために大規模な再開発が行われた。「北九州市の新しい顔づくり」というコンセプト通り、奇抜な色合いの建造物、オブジェの付いた橋が隣接し、異質な空間が生まれた。私は事業の大胆さに驚き、地域住民にとって小倉のまちはどのように変化したかについて、聞き取り調査を中心にまとめた。

北九州市の行う市民意識調査によって再開発を求める声は住民からも多いことが明らかとなっており、望まれた開発が行われたといえる。実際、再開発によって町への観光客数は増加している。しかし、全般的に施設オープン当初は好調なもの、継続的な入店者数を保つことができずリニューアルオープンを繰り返す苦しい展開となる店舗が多い。

ところがこのような商業施設に対し商店街は好意的な見方が強かった。これは、一つには郊外の

大型ショッピングモールの人気に対し、同じ商業圏として協力が不可欠であることが原因として挙げられる。

もう一つは「まちづくり」に対する個人の意識の高さがあるようだ。特に魚町銀天街など商店街の方は、商店街内の店舗も目まぐるしく入れ替わり、変化の必要性を強く感じている。

この「変化」に対し再開発によって整えられたのは外観のみである。ここに住む人々にとって心地よい町となることがこれからの課題であろう。現在、商店街や紫川周辺、小倉駅周辺一帯が協力してそれぞれ自前のイルミネーションを行う「ファンタスティックイルミネーション in 小倉」というイベントが行われている。北九州市の独自性はこういった団結力から、生まれるのだと感じた。

新しい建造物ばかりではやはり馴染みが薄い。且過市場などまだこれらの建造物とかかわりの薄い歴史あるものともかかわりあっていくことで新しい小倉の町が生まれるのであろう。

ミネラルウォーター販売における地場産業の振興 ：岩手県岩泉町「龍泉洞」を事例として

親川 麻由美

水道水質への不安、自然健康ブーム、水不足等の要因で、ミネラルウォーターの消費量が年々増加している。このことで、ミネラルウォーター販売を地場産業にし、地域経済を活性化させようとする取り組みが各地で起こっている。本論文ではそのうち、「龍泉洞の水」(岩手県閉伊郡岩泉町)を事例都市、どのようにして地場産業の振興に成功したかを明らかにしていく。

「龍泉洞の水」は、良質な龍泉洞湧水に着目した橋本勢津氏により開発が提案され、1985年に「龍泉洞地底湖の水」という商品名で発売された。生産量は、「龍泉洞の水」に名称変更したこと、コスト削減により価格競争に対応したこと、モンドセレクションで世界最高品質賞を受賞したこと

などから、概ね右肩上がりでも推移している。現在は通信販売、卸売販売ともに、東北・関東地方を中心として全都道府県で販売されている。

以上のように成功したことにより、町外から収入を得る手段になるなど主要な地場産業に成長した。その要因として、埋もれた資源を発見した橋本氏の存在、良質な水を地域経済活性化のために積極的に売り出したこと、どうすれば売れるのかを常に考え商品開発にあたったことが挙げられる。

主要な地場産業に成長したことで、様々な波及効果をもたらした。「龍泉洞の水」の関連商品としてコーヒー、烏龍茶、緑茶が開発された。また、1982年の会社設立時には15人であった従業員が70人にまで成長し、岩泉町の雇用の場創出に大